大賞は圧倒的な完成度

佃典彦

今回の選考会はいつもの大阪ガス会議室ではなくウイングフィールドで行われました。扇町ミュージアムスクエアでの選考会の様子を僕は知りませんが恐らくこんな雰囲気だったのではないかと推測致します。やはり劇場で戯曲や演劇について話し合うのは良いもんだなぁと実感しました。年の瀬に劇場を貸していただいたウイングフィールドの皆様に感謝です。

また今回は最終候補に残った作品どれも魅力があり、場所の雰囲気も相まっていつにも増して熱い選考会であったと思います。

まず、伊地知克介さんの『光と虫』から。

非常に好感が持てる作品でした。宇宙飛行士の登場によって世界観に広がりを持つことに成功しています。コロナ禍は我々人類にとって価値観を根底から覆す出来事でした。しかし遠く宇宙から見たらその出来事も小さいことかも知れません、我々が小さい蛍を見るように。ただ、勿体無いと感じたのは三組の対話が均等に繰り広げられてしまっているところです。どの組にも奇跡的偶然が設定されているのが非常に勿体無く感じられてしまいました。

植松篤さんの『トレマ』を僕ははじめに佳作に推しました。

円山は佐倉井にとってヒーローです。幼い頃、円山の後ろばかりを歩いていた佐倉井はしかし成長と共に円山から離れて行き、ついには立場が逆転していきます。人生のレール上を急行電車さながら上手く生きている佐倉井、途中で脱線したかの如く自宅にずっと引きこもったまま時が過ぎている円山。この二人の設定が素晴らしいと思いました。なぜなら、そんな佐倉井にとってやはり円山はヒーローなのです。円山と佐倉井が電車で故郷に帰るシーンがステキでした。

迷いに迷った結果、私道かぴさんの『てばなれ』を佳作に推しました。

私道さんの筆力が僅かに上回った感じです。本を読みながら実際に自分の身体の凝り固まった部分がほぐれていくような、僕の部屋の空気がアロマで満たされていくような、そんな体験は初めてでした。

前回、佳作を取られた作品もそうでしたが私道さんの身体に対する感覚の鋭さと、それを文章に変換できる筆力には本当に感服します。施術者の過去の話〈人生〉と目の前にいる訪問者をほぐしていく〈施術〉の組み合わせがもう少し噛み合っていればなぁ、というのが惜しいところでした。少々、過去の話〈人生〉が説明過多になっている気がしてならないのです。

橋本匡市さんの『躾けられない獣の群れ』は冒頭を読んでこれはオモシロイと思いました。子供の頃に穴に埋めた何かを掘り起こすって設定はもう使い古された手法で手垢が付きまくっているのですが、橋本さんはそんなコトは判り切っていてアッサリと答えを提出してしまいます。しかも「歯」です。ナゾと答えを冒頭に出してしまったこの話は一体どこに向かうのかとワクワクしました。

次に出て来るエピソードの〈巨大ザリガニを三十七年間探し続ける父〉の話も僕好みで好きでした……が、この立花池のザリガニにまつわる父と母の離婚話と、骨壺・仏壇・テレビ等自分を縛るモノを埋めようとする三姉妹の話がうまく噛み合っていないのが非常に勿体無いところです。

大賞は山岡徳貴子さんの『そして羽音、ひとつ』に決まりました。

一言で言えば圧倒的な完成度。グロテスクな世界を美しく描き上げる感性が素晴らしい。登場人物が全員どうしようもない現実を抱えていて愚かで悲しくて可笑しくて、もう誰が被害者で加害者なのかそんなことすら些末なことに思えてしまう世界観。それでいて最後の最後に積み重なった感傷をちゃぶ台返ししてしまう程の老婆の痛快さ。僕は老婆が逃げた瞬間、「やられた」と思いました。

最後は山村菜月さんの『かぜのたより』です。

僕は名古屋在住ですので久しぶりに関西弁で喋り倒す戯曲だぁと思って好感をもって読みました。一方通行的に年賀状を送りたい女と昔に借りた本を返したい男ってだけでよくこんなに書けるなと驚きを持って読みました。だんだんこの面倒臭い二人の関係に胸がキュンとするような感覚も楽しかったです。ほぼ動きの無いシーンが続くのと登場人物が入れ替わっても似たようなやりとりが続くところが少し苦しかったと思います。